

(2) 介護等体験を終えて 〈7〉

互いに支え合っている存在としての自分に気づく

法学部 2年 K.Y

私の介護等体験を一言で表すとしたら、「自分の中の『偏見』とのたたかい」だった。「偏見」といっても、何も人権団体の方に叱られてしまうような事柄ではなく、「勘違い」といってしまっても間違いではない。

私は、高齢の方や障がいをもった方に対し、「社会的弱者」という枠の中に当てはめて見ていた。我ながら、社会科の教科書にでも載っていそうな、優等生的な解答のように思う。もちろん、教科書を書いている人たちには、「悪意」などはなく、「社会的弱者」という言葉の後には、「だからこそ、社会が手助けをしなければいけない」というような「善意」にあふれた文脈が続くのだろう。しかし、今回の体験を通し、その「善意」の中に、私たちが気付かない「悪意」のようなものが含まれているのではないかと感じた。この「善意」は、障がいをもった人を区別し、「社会的弱者」という名前をつける。確かに、障がい者の方々は、手助けが必要だ。その点は多くの人が納得していると思う。しかし、「社会的弱者」という名前は、時に性格を一転させ、牙をむく。人は、その名前をもつ人々を、腫れ物に触るように扱い、その時、その名前は、「レッテル」に変わってしまうのだと思う。

私も、その「レッテル」に惑わされていた。しかし、今回、出会った人々は、誰一人として、私たちと変わらなかった。いや、むしろ私たちよりもよく笑い、よく声を出し、生活を楽しみ、生命感にあふれていた。体験中、多くの励ましを受けた。「よく勉強して、良い先生になってください。」「その笑顔があれば

大丈夫。良い先生になれるわ。」・・・そんな言葉をいただき、涙が出そうになってしまった。「手助けする」とは、何と傲慢な考えであったろうか。私たちは、障がいをもつ人や高齢者の方と共存し、支え合っている。そんな当然なことを忘れていたのだ。「社会的弱者」というような名前で捉えられるべき人など、どこにもいない。そこには、ただ個人が存在し、その1人ひとりが可能性を伸ばし、関わり合いをもち、楽しい人生を送る権利を有しているのである。

教育とは、全ての人の可能性を信じることから始まる。そしてそれは、全ての人を個人として尊重する姿勢からしか生れない作用ではないだろうか。

教職課程における介護等体験の存在意義が理解できず、苦しむ人もいるのではないだろうか。正直、私もその1人だった。しかし、今回の体験から私は、教育の根源というものを見た。それは、何十冊もの教育書を読むことよりも、格段に意味のあることであっただろう。

体験で関わった方々には感謝の言葉を述べるばかりである。教師となり、いつの日か、今回学んだ種々のことを、生徒たちに伝えたいと思う。それが私にできる恩返しだろう。